

第 11 回 (2022 年度) 日本哲学会林基金若手研究者助成報告書

豊田泰淳

1. 課題設定及びその背景

報告者はこれまで、主にローマ帝国領内で活動したプラトン派哲学者プロティノス (A.D.205-270) の思想から可感的事物の理解に関わる論点を取り上げ、その理解の成立に大きな影響を及ぼしたと考えられる紀元後のペリパトス派思想の役割を解明しようと試みてきた。プロティノスによる可感的世界の捉え方は、プラトンの『ティマイオス』篇の記述を下敷きとする一方で、そこにはプラトンより後代に現れたプラトン批判に対する再批判という文脈が控えており、そこで扱われる論点がプロティノスの思想を独自のもの、つまり「新」プラトン主義と呼ぶに値する思想ならしめていると考えたからである。

それを受け本研究は、可感的事物のあり方を説明する上で重要な位置づけを与えられる質料(ύλη)概念に定位し、ペリパトス派的質料論への批判を踏まえたプロティノスに独自と
言い得る質料理解を考察の対象とした。

2. 研究の方針と得られた成果

上記の問題を扱うにあたって検討したテキストは、『エンネアデス』第 26 論攷(III.6)「非物体的なものの非受動性について」である。当該論攷にはプロティノスの特異な質料理解が示されているが、その特異性の形成過程を解明するにあたっては、プロティノスが念頭に置いていた批判対象及びその批判の内実を明確にする必要がある。その特異性とは、題名にも現れる「非受動性(ἀπάθεια)」という質料のあり方である。ここで質料が非受動的であるとは、質料が如何なる点においても転化を被らないという事態を指す。当該論攷でプロティノスが再三主張するこの非受動性は、質料という同名の概念装置を採用するペリパトス派、ストア派らの理解と一線を画するための重要な論点であったのだと推定される。

差異を強調しなければならないということは、そこには共通性が見てとられるということでもある。プロティノス及びペリパトス派（ここではプロティノスより少し前に活躍したアフロディシアスのアレクサンドロスが想定される）の質料理解もそのような関係性であった。すなわち、両者の質料概念は、「非物体的(ἀσώματος)で無性質(ἀποιος)なるもの」と説明される点では共通点を持つのである（ストア派的質料は無性質であるが物体として理解されているため、プロティノスによる考察の主眼とはならなかったようである）。しかしながら、プロティノスはこれらのあり方に加え、そこに非受動性をも見てとるのである。つまり、ペリパトス派の質料はそれ自体が転化の主体となるが、プロティノ

スの質料は一切の転化を被ることがないという対立が明確となる。

ここまでで言及された質料とは、あらゆる可感的事物の基底にある第一質料のことであった。プロティノスが批判を試みたのは、可感的事物としてあるいわば第二質料の転化の仕方を第一質料へと適用する仕方の説明なのだと思う。ペリパトス派の如く、質料の内に留まる部分と転化する部分をとともに見出し、留まる部分にとって付帯的と見なされる新たな状態を獲得すると見る図式は、あくまで既に特定の性質を獲得している第二質料にしか当てはまらない。何故なら、第一質料は何も所有していないので、そもそも留まる部分を措定できないからである。この点は、第一質料と第二質料を連続的に捉えるペリパトス派の質料観が抱える根本的な困難だと言えよう。つまり、青銅と特定の形態が組み合わさることによりゼウス像が成立するとしたとき、以上の説明は問題なく適用可能なものと思われる。他方、第二質料の形相に対する相対的なあり方を突き詰めて考えていくとき、いずれ単純物体としての元素が出来する。この単純物体に関わる質料はもはや第一質料なのだから、上に述べた転化の仕方を当てはめることは出来ないのである。すなわち、この青銅に対しゼウス像を述語づけることは出来るが、第一質料に対し水を述語づけることは出来ないという違いである。これは、質料と形相からなる複合体の説明規定の内に質料を含み込むか否かという問題でもあるだろう。つまり、完成した青銅製のゼウス像は、その説明規定に青銅としてのあり方を含み込んでいるが、他方の単純物体としての水は、それが水たることの説明規定の内に第一質料のあり方を含むことは出来ない。プロティノスが根本的な問題と捉えているのは、以上の通り本来区別されるべき第一質料と第二質料のあり方が、質料というただ一つの名づけのもとに包摂されていることなのだと考えられる。

3. 今後の展望

以上の通り、今回扱うことが出来たのはプロティノスが理解した限りのペリパトス派、特にアレクサンドロスの見解であった。しかしながら、紀元前後のペリパトス派思想が一枚岩のものではなく、むしろアリストテレス解釈の多様性に溢れていたこともしばしば指摘される。今後はペリパトス派内部の論争という枠組みでも同様の問題を解明していきたい。